

私たちは「無駄」と「無益」をどのように解釈しているのでしょうか？昔の人の考え方では「無駄」は物を大切にするという意味で「もったいない」と解釈されていました。しかし今の若者は「こんなことやっても無駄」「意味がない」と「無意味・無益」と言う意味で使っています。全ての行動が無益かそうでないかで行動しています。私たちが何を無駄・無益だと思い、何を大切にしているのか、無駄の概念をもう一度考え直さなくてはなりません。この世に無益なことは何一つありません。ただ私たちの使い方無駄になることがあるのです。無駄とは私たちの使い方であり、私たちの生き方です。私たちは自身をどの様に使っていますか？これは使い方によっては無駄になる可能性があります。しかし、私たちがする努力や頑張り、今までやってきたこと、これは無駄になることは決してありません…（主とともにあれば）です。主とともにあればこれは無駄にはなりません。『私にとっては、生きることはキリスト、死ぬことも益です。しかし、もしこの肉体のいのちが続くとしたら、私の働きが豊かな実を結ぶことになるので、どちらを選んだらよいのか、私にはわかりません。私は、その二つのものの間に板ばさみとなっています。私の願いは、世を去ってキリストとともにいることです。実はそのほうが、はるかにまさっています。しかし、この肉体にとどまることが、あなたのために、もっと必要です。私はこのことを確信していますから、あなたがたの信仰の進歩と喜びのために、私が生きながらえて、あなたがたすべてといっしょにいるようになることを知っています。そうなれば、私はもう一度あなたがたのところに行けるので、私のことに関するあなたがたの誇りは、キリスト・イエスにあって増し加わるでしょう。ただ一つ。キリストの福音にふさわしく生活しなさい。そうすれば、私が行ってあなたがたに会うにしても、また離れているにしても、私はあなたがたについて、こう聞くことができますでしょう。あなたがたは霊を一つにしてしっかりと立ち、心を一つにして福音の信仰のために、ともに奮闘しており、また、どんなことがあっても、反対者たちに驚かされることはない。それは、彼らにとっては滅びのしるしであり、あなたがたにとっては救いのしるしです。これは神から出たことです。あなたがたは、キリストのために、キリストを信じる信仰だけでなく、キリストのための苦しみを賜ったのです。あなたがたは、私について先に見たこと、また、私について聞いていたのと同じ戦いを体験しているのです。』（ピリピ1：21～30）この箇所はパウロが死に直面したパウロが伝えたかったことは①喜びです。様々な活動をする時に喜びを忘れてしまったら、やっていることが本当の無意味になってしまいます。神さまと一緒にやっていたら絶対に無意味にならない…そういう道を私たちは造りあげたいです。②一致し分かち合うこと③思う・考えることです。私たちは考えない世代になってはいけません。今の世代は、自分に益か無益かだけは考えます。自分の不利・つらい状況は考えられます。しかし本当に大切な「なぜ私たちが生きるのか」を考えなくなっています。誰かのことを思ったり考えたりすることができなくなっています。私たちはどうでしょう？自分のマイナス・おかれている環境を思うことと、周りのことを思いこれから先のことを考える時間のどちらが多いですか？先のことをいつも考えられているのでしょうか？パウロが獄中で考えているように私たちも考えなくてはなりません。（27節）そして一致して交わりをもち、イエスキリストの愛で完成させていきましょう。私たちは神さまが私たちに与えてくれた道を行く直中にいます。その直中であって私たちは逃げたいとは思ってはいけません。そしてそれを無駄だと思ってしまうのは神の奇跡は起こります。パウロも自分の方法を使うことなく神の方法を待っていました。これは一つ一つ積み重ねられて益となる、決して無駄ではないと信じましょう。パウロのようにキリストの栄光をあらわすために①壊したものを立てない。神さまと約束した「もうやらない・しない」と決心して壊したものを立て直そうとしていませんか？『けれども、もし私が前に打ちこわしたものをもう一度建てたら、私は自分自身を違反者にしてしまうのです。しかし私は、神に生きるために、律法によって律法に死にました。私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が肉にあって生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。私は神の恵みを無にはしません。もし義が律法によって得られるとしたら、それこそキリストの死は無意味です。』（ガラ2：18～21）「もう立てない・しない」と決めたことはやっではないけません。私たちに必要なのは道だからそこを歩いているのです。ダメと言われて逆ギレでやって義が得られるのであればキリストの十字架は無意味になってしまいます。無駄にするのは私たちの考えと生き方です。人がどうこうではなく自分がどうあるか考えるべきです。②目の前の苦しみは種と思ひましょう。（ピリ1：29・30、詩126：4～6）現代では種は買ってきて簡単に蒔けます。しかし当時は飢饉で種がとれなくても来年のために食べるのをやめて蒔かなければならなかったのです。種まきは大変でした。私たちが今つらいと思うこと、涙を流していることは種まきだと思ひましょう。ネガティブな思いで種をまいても種が取られるだけで意味がありません。だから喜ばない時にこそ喜んで、実をならせない時にこそ実をつけて、目の前にある現状のせいで種をまくのを止めるのではなく、そういう悲しい時にこそ涙とともに良い地に「イエスの御名によって蒔きます」と蒔いていきましょう。③主がせよと言う無意味に感じることを忠実にいきましょう。「嫌だ・いらぬ」と思うことは主がせよと言われているのです。それを「しない」と選び、無駄にすることもできます。『私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が肉にあって生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。私は神の恵みを無にはしません。もし義が律法によって得られるとしたら、それこそキリストの死は無意味です。』（ガラ2：20・21）しかし、私たちはもう無意味にはしてはいけません。主がせよと言われているのは、命がけで私たちに愛をあらわした結果なのです。私たちに必要なのは、今、せよと言われていることは無意味に感じるかもしれませんが、しかし言い訳せずに負けないでやると決めたことは実行しましょう。そうしていけば無意味になりません。もう、壊したものは立て直しません。もう要らないと捨てたのに同じようなものを見つけて拾い、副産物をつけてもって帰るのは止めましょう。せっかく片づけたゴミを捨てるようなことは止めましょう。蒔いている苦しみは全て種だと思ひましょう。花壇は広がり収穫も増えます。だからこそ主がせよと言われることは喜んでやっていきましょう。必ず意味があり、無益なことは何もありません。その直中にいる時はつらく大変かもしれませんが、しかし私たちはそれを背負っています。イエス様に自分の重荷をゆだねたので私たちに負える重荷を神さまが私たちに預けてくれました。主とともに喜び歩み、逃げないで「私で良ければ負います」と宣言していきましょう。（要約者：行司佳世）